NO.694 2019　　教会報

教会テーマ『勇気と寛大な心をもって出かけて行きなさい』（教皇フランシスコ）―「ミッション2030」―共同体を生きる

MAGISを生きる

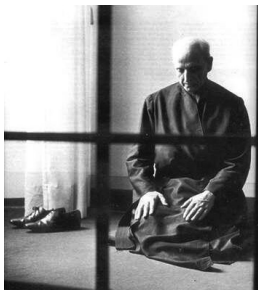
皆さん、復活祭はもう少しですが、新しい年度（学校や会社など）が始まった人も多いでしょう。主のご受難とご復活にあわせて、また新しい気持ちで歩んでいきたいと思っています。教会報は今月号からリニューアルしました。新スタッフが加入し、新たな姿を求めつつ、スタートしました。ちょっと新鮮な感じですね。

リニューアル版に当たり、教会報のタイトルであるMAGIS（マジス）の意味を説明したいと思います。これはラテン語で、「より、もっと、さらに」を意味する言葉です。英語で言えば、moreに当たります。イエズス会のモットーの1つで、アルペ元総長（1965年から83年まで在任）が使い出した言葉です。「アルペ」の名前は、信徒会館301号室の名でなじみがあるでしょう。日本管区管区長を務め、日本にゆかりのある神父さまで、奇しくも今年からイエズス会が本格的に列福運動を始めました。

英神父

マジスは、イエズス会の基本的霊性を表す言葉です。私たちはただ現状に甘んじるのではなく、いつもよりよいものを求め、より高いものを実現していく積極的な姿勢を示す言葉です。

2018年度の教会テーマは、「福音を伝える」ということで、それを意識してきました。そのためか、今回の洗礼志願者は100名を超えました。私がこの教会に来てから毎年70名から80名くらいでしたが、今年は大台を大きく超えました。数だけで判断すべきではないですが、それでも福音を伝える年にあたり、100名を超えたことに大きな実りを痛感しました。このようなことが、マジスの一例と言えるでしょう。数字に表れなくとも、福音を伝えることを願ったり、意識して生きられた方々が多いでしょう。そのような心がけ一つひとつがマジスの精神を生きていると言えると思います。


正座をして祈るアルペ神父

今度の復活祭から、新しい教会テーマは「共同体を生きる」です。自分自身が共同体を生きるために、もう少し何ができるかをふりかえり、少しでも何か実践していくことがマジスの精神を生きることなのです。一人ひとり、生きている中で課題や問題があるかもしれません。それをマジスの精神で前向きに受けとめ、さらなる一歩を歩んでいきたいです。

2019年度は、献堂20周年記念行事（6月を中心に）、イエズス会総長来日（7月）、教皇フランシスコ来日（11月）と、大きなことが続きます。このような記念の年をまさにマジスの精神で迎えたいと思います。

私の好きな英語の表現で、"I love you more than yesterday less than tomorrow."というものがあります。翻訳すると、「君を愛してるよ、今日は昨日よりもっと、明日は今日よりもっと」となります。結婚式で使ったりしますが、花嫁だけでなく、神さまに、教会に、人々に、花婿にも当てはめて使いたい表現ですね。今年は昨年よりもっと、来年は今年よりもっと、前進できるように、いつも前向きな気持ちでともに歩んでいきましょう。

主任司祭　英　隆一朗

教会報 MAGIS 4月号

† ミッション2030	2頁
† 教皇さま年内来日	3頁
† 四旬節黙想会	4－5頁
† おしえて？おしえて！	5頁
† イエズス会日本宣教史	6頁

４月の共同祈願

神様、
いつも私たちと共にいて下さることに
感謝します。
主のきずなによって結ばれた、
私たち聖イグナチオ教会の共同体が、
それぞれのタレントを活かし、
共に祈りつつ、
主のご復活を迎える準備が
できますように。

ミッション２０３０　－前文－

私たち聖イグナチオ教会は、祈りにもとづく使徒的共同体を生きていきます。

現代の社会は、命の軽視や孤独、過度の競争原理や格差、環境破壊など、未来に希望を見いだしにくい反福音的なものに脅かされています。それに対して、私たちは自分たちの殻に閉じこもることなく、いつくしみの扉を開いていきます。

私たちは、同伴者イエス・キリストと心を合わせて、貧しい人や弱い人の声を聴き、皆でともに手をたずさえて（日本人も外国人も、老いも若きも）、福音の喜びを分かち合っていく使命を生きていきます。

「共同体を生きる」年を迎えて

今年もまもなく復活の主日を迎えます。私は２０１３年に聖イグナチオ教会で受洗のお恵みに与りました。２０１５年、教会生活見直しアンケート調査が始まりました。受洗直後に見直し？…と大いに戸惑い、結局答えずじまいでした。この調査結果を基にして、教会生活見直しワークショップが開催され、２０１６年９月のミッション２０３０の策定に繋がったのでした。その後、縁あって２０１６年度より二年間、信徒評議員を務めることとなり、ミッション２０３０に出会いました。任期明け後も、ミッション２０３０「共同体を生きる」グループの一員として活動しております。

さて、ミッション２０３０について再確認いたします。

「私たち聖イグナチオ教会は、祈りにもとづく使徒的共同体を生きていきます。」（ミッション２０３０―前文―より）

当教会は２０３０年までの間、このミッションを実現していくために、「祈りを深める」、「福音を伝える」、「共同体を生きる」、「新しい『きょうどう』」の４つの柱を実践していきます。２０１７、２０１８年度と最初の２つの柱に年度テーマとして取り組みました。

そして、今年度のテーマは３番目の柱、「共同体を生きる」です。この教会が誰にとっても「わが家」であると思えるように、どんな人も迎え入れ、互いに支え合いながら、つながりを大切にしていくことを進めて行く１年となります。

「共同体を生きる」グループはこの２年間、既に多彩な活動を行なって参りました。

①新受洗者（受洗後５年以内）アンケート：新受洗者の定着の困難さを問題意識としてアンケート調査を実施いたしました。基本事項の理解不足が課題と判明し、回答者からの質問をＱ＆Ａ方式で取りまとめ、「信仰のしおり増補版」として新受洗者に配布しています。

②若手信徒派遣：当教会の若手信徒をワールドユースデー、アジアンユースデーに派遣いたしました。渡航費はみなさまからの献金によりご支援を頂きました。参加した若者たちは、後輩の信徒派遣や、その他の教会活動に活躍中です。

③長寿の集い：対象者の増加から、対象年齢を見直し、敬老ミサを土曜日から主日に移し、長寿の集いも同じ内容で２回に分けて実施する等の変更を行いました。

④ステラ・キッズ・カフェ：家族の団らんを求めている子ども達と共に食事を作り、温かい食卓を囲み「我が家」と思える居場所を提供する目的の活動を当教会内で立ち上げました。

⑤新たな活動の誕生：生きた共同体の分かち合いの会、メンズクワイア（男声合唱団）といった新たな活動も生まれ、育っております。

これらに続き、今年度は「共同体を生きる」ワークショップを隔月で全６回開催する予定です。共同体作りに関する実践テーマを毎回設定し、参加者により、実践の主人公の視点で自由な発想からアイデア出しを行なって参ります。初回は４月28日(日)に、英主任司祭のお話に続き、「もし、あなたが主任司祭なら」とのテーマで開催いたします。

「私たちは同伴者イエス・キリストと心を合わせて、貧しい人や弱い人の声を聴き、皆でともに手をたずさえて（日本人も外国人も、老いも若きも）、福音の喜びを分かち合っていく使命をいきていきます。」（ミッション２０３０―前文―より）

多様な世代・国籍から成る教会共同体、これを構成する活動団体、最少単位となる家庭における聖徒の交わりをより深めていく１年として参りましょう。

「共同体を生きる」グループ　田渕信也

教皇さま年内来日

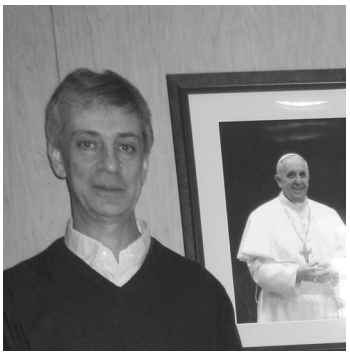
第266代教皇フランシスコは今年末訪日のご意向です。教皇来日はヨハネパウロ2世の1981年2月以来。教皇と同じアルゼンチン出身で直接指導も受けたホアン・アイダル神父（SJハウス院長、上智大学神学部教授）に、教皇と聖イグナチオ教会との縁や素顔、来日までの心構えなどをうかがいました。

アルゼンチンとの縁

――聖イグナチオ教会の周辺には、アルゼンチン出身司祭がレンゾ・デ・ルカ神父（イエズス会日本管区長）、アルフレド・セゴビア神父（六甲教会主任司祭）も含めれば3人もいらっしゃいます。

1983年、ローマでの総会に現教皇（当時、神学院長）もアルゼンチンから参加し、日本から来ていた粟本昭夫神父（元助任司祭）、ヨゼフ・ピタウ神父（元日本管区長）に出会いました。日本側はもっと働き手がほしいと、アルゼンチン側は召し出しが多くどこへ働き手を送ろうかと考えていたので話が合ったのです。イエズス会は元々宣教の会だから、召し出しが増えれば人を外に送ることを考えます。それに加えて、現教皇は当時から、恵みはうちにしまっておいては腐るという考え方の人でした。その結果、日本に送られたのがわたしたちです。

面白いのは昔も今も教皇にお会いすると必ず「粟本神父は元気か」と言われる。ところが、粟本神父は83年に現教皇に会ったことを覚えていらっしゃらない。教皇は記憶力がすごいのです。



アイダル神父　1965年生まれ91年来日。アルゼンチン・サンタフェ出身。

教皇の日本へのおもい

――ほかに日本との接点は

派遣先がなぜ日本なのかといえば、教皇の当時からの姿勢と一致するのですが、静かに、目立たず、純粋な福音宣教ができるのは日本だと色々な人から聞いていたのだと思います。

もう一つ、教皇自身が若い頃日本行きを希望しました。二十歳過ぎの59年、ペドロ・アルペ日本管区長がアルゼンチンを訪ね貧しい日本には「信仰の春」が来ると語りかけると、若き日の教皇は感動した。しかし、修練中だったため「早過ぎる」と言われ、2年後の61年にもイエズス会総長となっていたアルペ神父に手紙で切望したけれど、今度は教皇自身の健康問題が原因で断られました。若いときのこの夢が、人を派遣する責任者になったときの教皇に影響したのだと思います。

人を大事にする教皇

――どういうお方ですか

神学院での学生時代から中間期（実務研修期間）までの4年間、わたしは現教皇の指導下にいて、話す機会が多くありました。手紙やメールも送ります。魅力的な人です。イエズス会のモットーは、何も放棄しないこと。つまり、祈りも勉強も人間のすべてを大切にする。豚や牛の世話もすれば、洗濯機が壊れたら直しもする。そして教え、霊的な話もする。そのモデルが教皇なのです。人をすごく大切にします。人に興味をもち、忘れない。かといって、計算して人と接するような政治家ではない。「お父さん」のような存在。それは聖イグナチオと同じです。

「待ち」の教会を力づけたい

――今回の来日の目的は

よく言われるのは、教皇は朝早く祈った後しばしば新しい考えを示されます。世界のどこに行かれるにせよ教皇の目的は2つです。一つ、教会に力をまし加えること、二つ、福音宣教をすること。

日本の教会は、教皇の言葉によれば、「待つ教会」です。かつて迫害を受けたときには耐えしのんで待ち、迫害が終わり信仰のなくなった時代が来るとまた信仰復活を待っている教会である、と。待つことはつらいですね。だから教皇のわたしが出向き日本の教会に力をつけなければいけない。「がんばってください」ということが目的の一つです。

もう一つは福音宣教です。教皇は世界の指導者の中でも非常に珍しいタイプです。経済中心で考える指導者、自国中心の指導者、パワーやカネに頼るいろいろなリーダーの中で、福音の価値観によっても問題解決の道があると発言し行動する魅力的なリーダーです。こうした行動、価値観、スタイルそれ自体が福音宣教です。

心をひらく準備を

――わたしたちは教皇をどうお迎えしましょうか

聖霊に満たされた教皇の言葉を素直に受け入れることです。教皇の来訪は主なる神の恵み。神の恵みはいつも人の想像できなかった新しいものです。大きな希望をもって心をひらき、素直に受け入れる態度でいましょう。教皇にはこの問題に言及してもらいたいとか、何かを期待して、そうでなかった時にがっかりしていたのでは、イエスがきたときと同じです。「そのときイエスが来て話したがだれもうけいれなかった」とならないようにしたいものです。

四旬節黙想会

指導司祭：酒井陽介神父

四旬節黙想会が3月21日「神のしもべ　ペドロ・アルペ――他者のために生きた人」をテーマに、酒井陽介協力司祭の指導により行われました。ご自宅などでイエスにならい黙想し回心する際の手引きとしてご活用ください。

講話Ⅰ「他者とともに」

信徒会館アルペホール由来の人、アルペ神父の霊性をたどり、彼のメッセージを分かち合いたいと思います。神父は1907年スペイン生まれ。大学医学部ではトップの成績でしたが、ルルド巡礼で召命の確信を得ると卒業をまたずにイエズス会に入会。叙階後、宣教師にという願いがかなって来日し、40年から山口教会で司牧を始めました。

戦争の初頭、スパイ容疑で捕まり独房生活を送りました。山口時代が人生で最も教えられることの多かった時と書いています。

独房では過酷な留置に苦しむ中、クリスマス前夜塀の外から聖歌が聞こえ自分の教えた青年たちの励ましの歌声と気づき「むせび泣きました」。

約1か月後に釈放されましたが、闇の中で不安や恐れを味わい、自分の小さを感じ、全てがはぎ取られ、それでも残るのは信仰、という体験をしました。イエスと一対一で出会ったこの時代がアルペ神父を形作ったと思います。

42年から広島の長束修練院で修練長を務め、45年原爆を経験します。爆風が修練院まで届き、神父も飛ばされました。それでも内にこもるのではなくすぐに修練院を野戦病院にして150人以上の負傷者を収容しました。収容者の食糧を買い出しにいくと奇跡のように食糧が手に入りました。目の前で苦しむ人々のため、自分の体を使い憐れみの技を行う。神父は「他者のために生きる」を具体的に生きました。

アルペ神父の生き方であなたの心に刺さるものは何か、自分は何を問われているのか。

「他者とともに生きる」をゆっくりと黙想してみて下さい。

アルペ神父を囲んで、戦前の山口教会

黙想法（編集スタッフH）

午前の講話の終わりに黙想の仕方を教わりました。①気に入った場所を見つけて座る。②呼吸を整える。③両足裏が地面についている感覚を持つ。④自分は「今、ここにいる」という感覚を大事に、手の置き場を意識する。⑤頭の先からつま先まで心眼で見る。⑥何度か深呼吸する。⑦主のまなざしが自分に注がれていることを意識して黙想する。

講話Ⅰについて
静かに
黙想して
みましょう

イエズス会会員の葬儀へのご奉仕

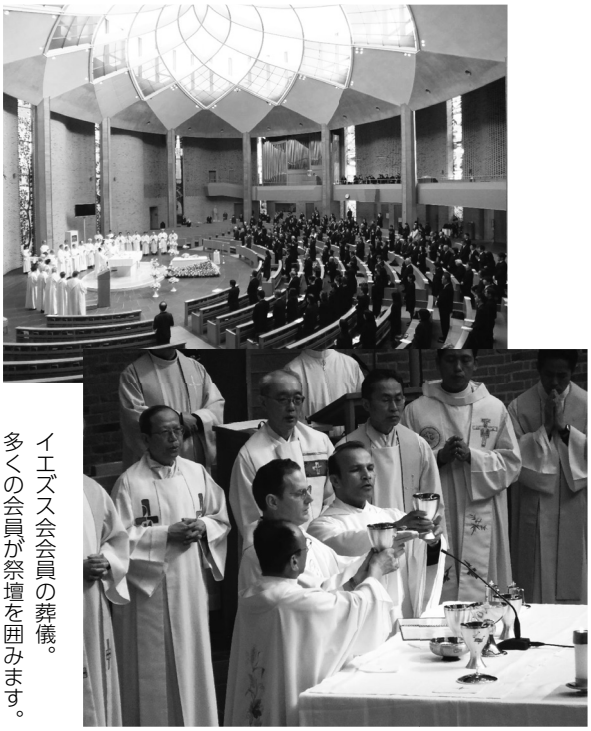
日々の典礼にいろいろな形でご奉仕している方々が大勢いらっしゃいますが、これからはその奉仕の範囲も広がっていくことが考えられます。

イエズス会日本管区の現況は、会員（司祭、修道士）数が180人を切り、平均年齢69歳、80歳以上の方が70人を越えようとしています。これに伴い、聖イグナチオ教会における会員の通夜葬儀の数も増える傾向にあり、最近は毎月のように行われています。

こうした現状にあって、イエズス会から聖イグナチオ教会に協力のお願いがあり、通夜葬儀にあたって先唱グループ、朗読グループ、聖体奉仕者グループ、聖堂係、典礼聖歌隊、そしてオルガニストの方々にご理解とご協力をお願いしています。

帰天される諸先輩の最後の姿を拝見しながらいつも感じることの一つは、「イエズス会。Yes, I did it my way. Amen.」。

助任司祭　李（イ）相源（サンウォン）



イエズス会会員の葬儀。多くの会員が祭壇を囲みます。

講話Ⅱ「他者のために」

「他者のために」は、アルペ神父が残した中心的なメッセージです。人々のために生き、自分の力や恵みを分かち合うことで成長し、より完全な人間になっていく。この過程がイエズス会の「マジス（より、もっと、さらに）」だと示したのです。

他者のために生きるには、自分が保身やエゴから抜け出し、自分の力や賜を具体的に分かちあうことが必要です。周囲から浮いたり失敗したりするかもしれない。だから主に勇気を願い求める。自分の深い望みを意識し、それが神の望みとつながるなら、神の定めた時に必ず実現する。これが聖イグナチオの霊性の根幹です。神父の言う「人々のための人」とはキリストとともに成長する人で、成長は死ぬまで続きます。

神父が総長引退直前に語った「キリストは私の全て」という言葉は、我々も大切にしなければなりません。イエスのように語り、自分を差し出す。これはキリスト者が最期まで追い求める理想です。

私の召命は何だろうと思う人は、自分の深いところにある望みは何かを見つめて下さい。それがあなたの召命のあり方です。

神のしもべ　ペドロ・アルペ
――他者のために生きた人

講話する酒井神父

§ **ペドロ・アルペ神父** §

スペインのバスク地方出身。医学を学んだ後、イエズス会入会。1938年来日。戦争中、一時投獄の憂き目にあいながら広島・長束の修練長を務め、原爆の際には修練院を臨時病院として被爆者救護にあたった。初代日本管区長を1965年まで務めた後にイエズス会総長に就任。1991年（83歳）ローマで帰天。2018年、ローマ教区において「列福調査」が始まることが発表された。

講話Ⅱについて
静かに
黙想して
みましょう

感想（編集スタッフS）

召命の恵みに与った私たちは、アルペ神父のメッセージを真摯に受け入れて生まれ変わり、新しい眼で見る努力を日々しつつ、エゴから抜け出して一歩踏み出す勇気を持ち続けたいと思います。

酒井神父より、もう一言

アルペ神父は、独房で苦しみ、それでも復讐ではなく愛で返し、「他者のために」を具体的に生きました。私たちは、自分の殻から一歩踏み出し、やらなければいけないときには出来る範囲で勇気を出す。イエスがあきらめず愛してくれた。それがあっての私なら喜びを感じていけます。

おしえて？
おしえて！

Y.O

「聖霊って？」

はじめまして！　２０１８年のクリスマスに受洗した新米の信徒ですが、教会報編集の一員に加えられました。洗礼の恵みを受けてから、素敵な毎日を送っていますが、説明の難しい出来事や言葉があり、不思議でならないことも多い日々です。そんな私の疑問に司祭がたが一つひとつ答えてくださるコーナーが与えられました。よろしくお願いします。「わたしも聞きたい」ということがあればご提案ください。

（編集スタッフ・E）

【E】　最初の疑問は「聖霊」です。私たちは日頃、「父と子と聖霊のみ名によって」と祈ります。父である神、子であるイエスはわかります。でも「聖霊」ってどんな存在なのでしょうか？

【英神父】　聖霊とはエネルギーのようなものであって、神様の息吹のような、あるいは風のようなものと表現できるでしょう。

【E】　ほかに理解を深めるヒントはありますか？

【英神父】　もっと理解するためには、「三位一体」を考えるといいでしょう。父と子、そして聖霊は「3つのペルソナ」すなわち「3つの姿」をとっていながら、本質としては一つなのです。

たとえば「ヨハネの第一の手紙」には「神は私たちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。」（第1ヨハネ 4：13）とあります。これこそが「聖霊」です。　この、神様が与えてくださった神御自身の霊によって、私たちは神様に留まることができます。「体の内側から湧き上がるもの」、「心が満たされる」、「執着が減って解放された感じがする」、「外のもので埋める必要がなくなる」というときがありませんか。

【E】　それなら私にも感じたことがあります。洗礼の前後から気になっていたことから不思議と解放されたり、つまらないことを気にしなくなったり、毎日が気楽になったり、と。不思議な感覚を味わいました。

【英神父】　神様からは一人一人に違う霊の賜物が与えられます。一人一人が違うからこそ、私たちも社会も豊かになるのです。だから私たち教会のメンバーは、自分の得意な分野でそれぞれに能力を発揮して奉仕していくことが大事です。

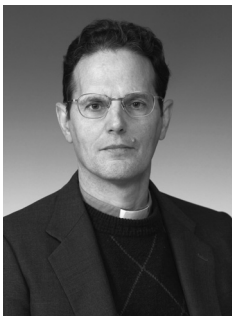
（英 隆一朗神父「信徒入門講座」から）

イエズス会日本宣教470年①

聖フランシスコ・ザビエルが日本に福音を伝えた1549年から470年間、キリスト教信仰の光は長い禁教期にも途切れず継承されてきました。日本宣教を切り拓いたイエズス会の日本管区教会の信徒として、類い希な宣教の歩みと恵みを1年かけて振り返ります。

聖ザビエルの蒔いた種――「対話的宣教」の遺産

イエズス会日本管区長　レンゾ・デ・ルカ



レンゾ神父

新しい宣教方針

ザビエルとその仲間が16世紀に来日し、未知の世界と出会いました。宣教師とは未知の地に福音を伝えるものであり、日本で異なる文化に出会ったことは当然に思ったに違いないでしょう。しかし、彼らは当時の常識だった「教育型宣教」ではなく、新しい宣教を日本で実行しました。日本人信徒にスペイン語などを学ばせずに日本語で宣教したり、自分たちが仏教の教えを学んだりして、新しい「対話型宣教」を導入したのです。それは世界の教会全体のあり方に大きな影響を与えました。

ザビエルは来日前、マラッカで日本人のヤジロウに出会い「日本のことを学ぶ生徒」になりました。日本語のみならず宗教などについても最期まで勉強を続けました。ザビエルは、それまでの宣教の方法をとらず、後継者で同じくイエズス会司祭のトーレスやヴァリニャーノたちも「現地文化中心の宣教」を採りいれました。全面的に現地の人に任せるという新しい宣教の姿勢でした。

その結果、ザビエルの来日からわずか5年後、薩摩のベルナルドは欧州を訪れ、リスボンで日本人初のイエズス会入会が認められました。1557年には目の不自由な琵琶法師だったロレンソ了斎が入会しました。日本での宣教は外国人宣教師ではなく、日本人を中心にした宣教に変わったのでした。

日本で宣教するため、仏教や神道と比較してキリスト教の素晴らしさを証明する必要があったのでしょう。当時の宣教は、他の宗教と討論するよりも無視する方が多かったのです。日本での宗論は対等に議論できる相手として確認した現れだと解釈しています。

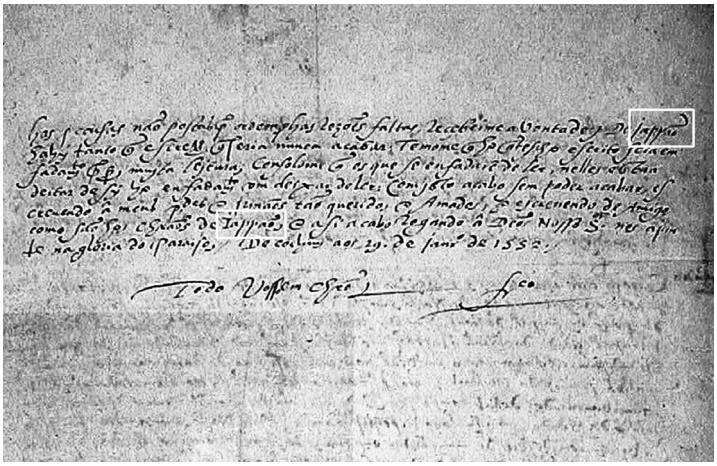
「乗っ取られる恐れ」とその対策

当時の多くの宣教師にとって、東アジアでイエズス会がとった動きは危険な路線でした。宣教の歴史の浅い地域でキリスト教を自立させれば、本来の教えから離れた異質な宗教になりかねない恐れがあり、時間をかけて地元に任せる部分を慎重に考えるべきだと思われていました。キリスト教そのものが地元文化に「乗っ取られる恐れ」が潜んでいたからです。

当時、ザビエルやヴァリニャーノたちがとった路線は、成功より失敗する可能性が大きい危険な冒険と思われたでしょう。世界的な広がりを見せていたイエズス会員の間でもこの動きは理解されず、東アジアでの方針は地域と時期が限定された宣教にとどまりました。ただ、そうであっても、この時期にこの方針が実行され、優れた結果が現れたことを高く評価したいと思います。日本では急速に信徒が増え、多数の殉教が生まれました。歴史を振り返ることで、当時の姿勢から学ぶことが出来ます。彼らのビジョンは預言的だったと私は思います。

簡略にいえば、ザビエルたちは「教会が乗っ取られても任せる価値がある」という領域を超え、「乗っ取られて初めて本来の教会になる」と感じていたと私は考えます。それは、無分別や過剰な熱心さからではなく、全ての文化に最初から聖霊の恵みが潜んでいると信じていたからだったと解釈しています。日本の殉教者の多さ、さらに200年近くも外国の指導者なしに信仰を守り通した潜伏キリシタンの歴史を見れば、現地の人々に全面的に教会を任せたザビエルたちの選択が正しかったと言えるでしょう。

私たちも、時々浅く見えますが、現代の文化に働く聖霊を見極める挑戦を受けていると思います。教会や修道会が、「乗っ取られる恐れ」を感じるのなら、ザビエルたちの姿勢は光となります。つまり、乗っ取られて、現代文化の一部になることでこそ、キリストの福音を伝える教会や修道会になると思うからです。



イエズス会会員に宛てた1552年1月29日付のザビエル書簡

お手伝い募集

【棕櫚の枝切り】
4月12日（金）10：00～12：00　ヨセフホール
受難の主日に使用する棕櫚の準備をします。事務室へお申込みください。
（持ち物　エプロン・軍手・花ばさみ）

【イースターエッグ飾りつけ】
4月20日（土）9：00～12：00　ヨセフホール
お子様も参加できます。事務室へお申込みください。
（持ち物　エプロン）

・――・――・――・――・――・――・――・――・

ウェルカムテーブル

4月14日（日）に〝ウェルカムテーブル〟が発足します。だれにでも開かれた教会を一緒に築いてまいりましょう。案内所も兼ねております。新しい活動に皆様からの暖かいご支援をお願いいたします。

ミッション2030　「福音を伝える」グループ

・――・――・――・――・――・――・――・――・

「共同体を生きる」ワークショップ

4月28日（日）　13：00～15：00　ヨセフホール

第1回テーマ：「もし、あなたが主任司祭なら」
お話：英 隆一朗主任司祭
詳細はポスター、チラシでご確認ください。

協力司祭退任

酒井陽介神父様は4月から上智大学で教職に就かれることになり、協力司祭を退任されます。

・――・――・――・――・――・――・――・――・

歓迎会と金祝お祝い会

5月5日（日）　10：00ミサ後　ヨセフホール

・アメリカからボニー・ジェームス神父様が助任司祭としていらっしゃいます。
・主聖堂で毎日告解を聞いていただいているダニエル・コリンズ神父様が司祭叙階50年を迎えられます。

・――・――・――・――・――・――・――・――・

ワールドユースデーパナマ大会帰国報告会を開催しました

3月3日（日）大会で成長した派遣者3名が元気に報告をしました。

ワールドユースデー帰国報告会第２弾

4月13日（土）16：00～17：30　ヨセフホール

新たな内容も加えて行ないますので、初めての方も2度目の方もご来場お待ちしております。